

立命館大学

国際平和ミュージアムだより

KYOTO MUSEUM FOR WORLD PEACE, RITSUMEIKAN UNIVERSITY

Vol.32-3 (通巻95号) 2025.3.17発行

希望はどこにあるのか

君島 東彦 (立命館大学国際平和ミュージアム館長)

さまざまな政治変動を経験した2024年を終えて2025年を迎えたいま、国際平和ミュージアムのこの1年間の活動を振り返ってみたいと思います。わたしにとって最大の問いは、現在の世界の閉塞状況の中で、平和への希望はどこにあるのか、ということです。国際平和ミュージアムの任務は、いまの世界の暴力状況を学問的にリアルに認識したうえで、どこにそれを平和的に変革する道、可能性があるのかを来館者とともに考え、それを示していくことだろうと思います。

ここでは、2024年の国際平和ミュージアムの活動の中から、わたしが感じた可能性、希望をいくつか書き記しておきます。

わたしは2025年に創設80周年を迎える国連の活動に希望を持っています。国際平和ミュージアム・リニューアル記念として、11月1日に国連事務次長・軍縮担当上級代表の中満泉さんの講演を聴き、立命館大学、APUの学生、附属校の生徒のみなさんとともに中満さん対話をしました。この中で、日本の報道では十分に伝わってこない国連の活動——国家間の調整を静かに深く浸透して行なっていること——を知りました。国際協調、国際協力が弱まっているいま、もっとも重要な国際協力の枠組みである国連を支えていく日本の役割を痛感します。間違いなく国連に希望があります。

中満さんが講演の中で強調したのは、若い世代の役割でした。もちろん若い世代に希望があります。国際平和ミュージアムの運営においても、学生スタッフの貢献ははかりしれません。平和をつくる次の世代を準備することは、われわれの最大の課題のひとつです。立命館大学の各学部、附属校と連携しつつ、若い世代を育てる仕事を2025年も継続・強化します。日本被団協が2024年のノーベル平和賞を受賞したこと自体が希望ですが、ノルウェー・ノーベル委員会が授賞理由の中で核兵器廃絶をめざす努力が若い世代に継承されていると述べていることも重視したいと思います。

2024年の活動の中で、戦没画学生慰霊美術館・無言館との連携を深めたことも重要だったと思います。わたしたちは1999年から無言館との関係を築いてきましたが、昨年の連携強化は2005年の無言館京都館「いのちの画室（アトリエ）」開室以来のわたしたちの大きな「進化」であるといえます。平和創造にとって芸術の持っている力を再発見、再確認したことはわたしたちの希望です。12月5日に、無言館共同館主、内田也哉子さんをお迎えして、内田さんがファシリテーター役をつとめて開催された「絵は読むもの？ 無言館共同館主・内田也哉子さんとの対話型鑑賞会」は、わたしたちが芸術から平和にアプローチする新たな可能性を示したと思います。内田さんはNHKの番組「no art, no life」のナレーションを5年間つとめていらっしゃいます。この番組は、「今まで見たことのない芸術に圧倒される5分間」です。この番組の表現を借りれば、「no art, no peace」なのです。立命館大学は2026年4月に17番目の学部としてデザイン・アート学部を（同時

に大学院デザイン・アート学研究科も）開設します。わたしは、この新学部と国際平和ミュージアムのコラボレーションを実現したいと思っています。

ロシア・ウクライナ戦争、ガザ危機は続いています。これらの武力紛争、人道的危機を法的に克服するための努力が国際司法裁判所や国際刑事裁判所等ですなされています。非常に時間がかかりますが、もちろんここにも希望があります。

しかし同時に、わたしたちを悩ませるのは、どうしてロシアはウクライナを攻撃するのか、どうしてイスラエルはここまでガザを攻撃するのか、われわれの正義の感覚を超えたレベルに至るロシア、イスラエルの暴力行使の問題です。これについては、12月21日に開催されたシンポジウム「平和ミュージアムの挑戦——記憶と対話を通じた戦争によるトラウマの癒し」が大きな示唆を与えてくれました。このシンポジウムは立命館大学大学院人間科学研究科と国際平和ミュージアムの共催でしたが、平和を考えるにあたって、心理学や精神分析学がどれほど重要かを痛感させました。

このシンポジウムはロシア、イスラエルの問題を扱ったわけではありませんが、わたしは多くのことを考えさせられました。ロシアの攻撃、あるいはイスラエルの攻撃の背景には、まだ克服されていないロシア人が過去に受けた屈辱、ユダヤ人がこれまで長年にわたって受けてきた屈辱、まだ癒やされていないトラウマがあると思います。もちろん現在のロシアやイスラエルの軍事行動はおよそ正当化されるものではなく、われわれは現在進行中の殺戮を止めるために全力を尽くすべきです。しかし、ロシアやイスラエルに対して国際法を遵守せよというだけでは抑えきれないロシア人やユダヤ人が負った心の傷を、国際社会はどのように認識して、癒していくことができるのか、という課題も自覚せざるをえません。さらに、ウクライナ人やパレスチナ人がいま経験している苦難、屈辱、心の傷が、これから長期にわたってどのような「反作用」をもたらすのかと考えると、われわれの悩み、課題はきわめて大きなものとなります。このような過去の屈辱に由来する心の傷、トラウマを癒す空間として平和ミュージアムには役割、可能性があるということを12月21日のシンポジウムはわたしたちに認識させました。平和ミュージアムは記憶の共有と対話を通じてトラウマを癒す空間として機能することが可能であり、それによってさらなる暴力の連鎖を防ぐことができるということです。わたしはここにも希望があると感じます。

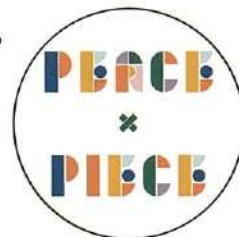
2025年はこれらの希望の芽を育てる年にしたいと思います。2025年もみなさまのご支援をたまわりますよう、お願い申し上げます。



公式YouTube、国際平和ミュージアムの魅力を発信するチャンネルです。
ぜひチャンネル登録をお願いします！

アカウント名 @rwp_museum

URL https://www.youtube.com/@rwp_museum



立命館大学国際平和ミュージアムだより



立命館大学国際平和ミュージアム
Kyoto Museum for World Peace, Ritsumeikan University

第32巻 第3号（通巻95号）2025年3月17日発行

編集・発行 立命館大学国際平和ミュージアム

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1
TEL : 075-465-8151 / FAX : 075-465-7899
<https://rwp-museum.jp>



HP



Instagram



日本平和博物館会議
JAPAN ASSOCIATION OF MUSEUM STUDIES (JAMS)

今後、特別展のご案内、ミュージアムだより等、国際平和ミュージアムより送付をご希望されない場合、また、送付先の住所変更等ございましたら、氏名・団体名、送付先住所、電話番号、FAX番号をご記入の上、FAXにて国際平和ミュージアム（075-465-7899）へ送信ください。